

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

エチオピア「エントト山の情景」

現在、私はエチオピアで「オロミア州マルチセクター計画・予算策定支援プロジェクト(JICA)」に従事しています。JICAでも対象国が中央集権から地方分権へと移行する際の、制度と実際のギャップに対処する案件は少なくありませんが、本プロジェクトは教育や保健といった特定のセクターではなく、計画や予算策定を担う財務経済開発局への支援を通して複数のセクターに裨益しようとする点が特徴的です。本稿では仕事を少し離れて、エチオピアで出会ったある情景について書いてみようと思います。

エチオピアの公用語のアムハラ語で「新しい花」を意味するアディスアベバは、1886年に皇帝メネリク2世により建設されました。アディスアベバはエチオピアの首都であるだけでなく、オロミア州の州都という別の顔も持っており、地方語のオロモ語では「フィンフィネ」とも呼ばれています。北緯9度と赤道近くに位置しますが、標高が高い(約2,400メートル)ため、過ごしやすく、現在は人口約300万人を超える大都市に発展しています。市内のあちこちでビルの建設が行われており、また新市街地に繋がる道路工事の様子からも、経済活動が活発であることが窺えます。

そのアディスアベバを見下ろすエントト山(標高約3,200メートル)は、博物館や教会が点在しており、市内を一望できることもあって、観光客も多く訪れる場所です。市の中心部から車で30分ほど走ったところにある山の登り口には、衣料品や食料品を扱うマーケットがあり、買い物客で賑わっています。その雑踏を抜けてしばらく急峻な山道を登って行くと、自分の体重と同じくらいの大きな薪を背負子(しょいこ)に縛って山道を降りてくる女性たちに次から次と遭遇します。年齢は様々です。老婆もいますし、少女も混じって



薪を運ぶ女性たちとロバが山道をすれ違う



少女たちも薪運び



山頂付近で給水の順番を待つ人々

います。薪がかなり重いのでしょう。路肩の石垣にもたれかかって休んでいる姿をあちこちで見かけます。山頂から麓までは約4~5キロの道程ですが、暑期中、荷物を背負っての移動を考えると一体どれだけの時間がかかるのか、気が遠くなります。この「エントト山の薪運び」は昔から女性の仕事とされているようで、今でも貴重な現金収入となっています。とはいえ、その重労働にもかかわらず一日の稼ぎは10ブル(約50円)程度にしかならないそうです。

薪を背負って山を降りる女性たちと山麓から山頂の集落へと食料を運ぶロバが坂道をすれ違います。重い荷物を負ったロバ達はゆっくりとゆっくりと、しかし着実に坂を登っていきます。山頂部では水を買って求める人々がいました。小さな小屋の中に水道の蛇口があり、人々は青や赤や黄の色鮮やかなポリ容器を持ち寄り、日々の生活に必要な水を汲んでいます。水は決して無料ではなく、30リットルのポリ容器につき、0.1ブル(約0.5円)を係の女性に支払います。この水を自宅まで持ち帰るための台車があるわけでもなく、皆、手で持ち帰っています。水運びも重労働でしょう。麓から山頂まで登る間に、エントト山で暮らす人々の日常生活の一旦を垣間見ることができました。

プロジェクトが始まってまだ半年余り。仕事でも日常生活でも日々新しい発見や驚きがあります。この日はこれまで知らなかったエチオピアをまたひとつ見つけた気がしました。

(文責：IDCJ研究員 大口修平)